

知床半島先端部の鳥類

中川 元

知床博物館学芸員

はじめに

知床博物館による知床半島総合調査の初年度調査として、1982年夏に知床半島先端部の鳥類調査を行った。

知床半島は今なお原生的動物群集の残されている地域であり、本来の自然条件下における動物相の総合的調査・研究を一つの地域で実施できる場所として貴重である。知床半島の総合的調査としては、網走道立公園審議会（1954）、北海道教育委員会（1967）、帯広畜産大学（1962）があるが、これらは調査期間や地域が限られており全般的な動物相の把握には至っていない。最近になって1979年と1980年の2ヶ年で知床半島自然生態系総合調査が行われた（大森司(編)、1981）。この調査では13人の調査スタッフと動物学を専攻する多くの大学院生や学生の手によって、長期間広範囲にわたる脊椎動物相の調査が行なわれている。このほかに、知床半島の鳥類相については 広野（1978）と森（1979）が長期間の観察記録から、鳥類リストと季節的变化をまとめ報告している。

筆者は今調査に先立ち、1979年と1980年の夏にそれぞれ2回、知床半島先端部の鳥類について調べたが（中川、1981）、ここではその結果の一部も引用して報告する。

調査地の概要と調査方法

知床半島先端部（知床岬地域）は、陸路もなく、人の活動も海岸に点在する魚業番屋でわずかに行なわれている程度である。それだけに本来の自然環境が長く保たれてきた地域と言える。

調査範囲は斜里郡斜里町と日梨郡羅臼町にまたがり、知床岬とその周辺の海岸部及び標高20～50mの知床岬台地草原、そして丘陵の森林地帯である。海岸部は両町の境界をはきんで異なった景観を示している。斜里町側は高さ20～40mの海食崖が続き、海岸線は複雑で侵食作用による奇岩や海食洞が多



写真1. 知床半島先端部海岸線

く見られる。そして、干潮時には各所で岩礁が広く露出する。一方、羅臼町側海岸は単調な転石浜が続き、一部に切り立った崖もあるが、大部分はやや急な斜面を経て台地草原となっている。

知床岬の台地上は平坦な草原または笹原である。ススキ、イワノガリヤス、エゾヨモギ、クマイザサ、チシマザサ等の群落が大部分を占め、一部にはガンコウランやシコタンザサの群落も見られる。丘陵の森林は、台地草原に接する部分が広葉樹林となっているほかは、トドマツの多い針広混交林である。

調査は1981年6月6～7日、7月14～15日の2回行った。使用器具は7倍の双眼鏡、25倍の望遠鏡、ワイゼー測高器などである。海岸部の営巣地調査では船も利用した。

調査結果と考察

(1) 観察された鳥類

表1に観察された鳥類のリストと環境を示す。今調査で36種が観察され、1979年、1980年の結果を合わせると77種の鳥類が記録された。海岸、岩礁帯では北海道で冬鳥とされているホオジロガモやシロカモメが見られたほか、シノリガモ（雄及び雌型）が例年観察された。カンムリカイツブリ、

表1. 知床半島先端部の観察鳥類リスト

種	名	1) 今調査 (1981)	2) 中川 (1981)	3) 生息環境
1	オオハム	Gavia arctica	+	S
2	カンムリカイツブリ	Podiceps grisegena	+	S
3	ハシボソミズナギドリ	Puffinus tenuirostris	+	S
4	ウミウ	Phalacrocorax filamentosus	+	S
5	ヒメウ	Phalacrocorax pelagicus	+	S
6	チュウサギ	Egretta intermedia	+	S
7	アオサギ	Ardea cinerea	+	S
8	シノリガモ	Histrionicus histrionicus	+	S
9	ホオジロガモ	Bucephala clangula	+	S
10	オジロワシ	Haliaeetus albicilla	+	S
11	オオタカ	Accipiter gentilis	+	F
12	ハイタカ	Accipiter nisus	+	S
13	ノスリ	Buteo buteo	+	F
14	ハイイロチュウビ ⁴⁾	Circus cyaneus	+	S
15	ウズラ	Coturnix coturnix	+	G
16	キアシシギ	Tringa brevipes	+	S
17	イソシギ	Tringa hypoleucos	+	S
18	ヤマシギ	Scolopax rusticola	+	F
19	オオジシギ	Gallinago hardwickii	+	G
20	アカエリヒレアシシギ	Phalaropus lobatus	+	S
21	オオセグロカモメ	Larus schistiagnus	+	G, S
22	シロカモメ	Larus hyperboreus	+	S
23	カモメ	Larus canus	+	S
24	ウミネコ	Larus crassirostris	+	S
25	ミツユビカモメ	Larus tridactylus	+	S
26	ウトウ	Cerorhinca monocerata	+	S
27	キジバト	Streptopelia orientalis	+	F
28	アオバト	Sphenurus sieboldii	+	F
29	ツツドリ	Cuculus saturatus	+	F, G
30	アマツバメ	Apus pacificus	+	F, G, S
31	アリスイ	Junco torquilla	+	G
32	ヤマゲラ	Picus canus	+	F
33	アカゲラ	Dendrocopos major	+	F
34	コゲラ	Dendrocopos kizuki	+	F
35	ヒバリ	Alauda arvensis	+	G
36	ツバメ	Hirundo rustica	+	G
37	イワツバメ	Delichon urbica	+	G, S
38	ツメナガセキレイ	Motacilla flava	+	S
39	キセキレイ	Motacilla cinerea	+	S
40	ハクセキレイ	Motacilla alba	+	G, S
41	ピンズイ	Anthus hodgsoni	+	F, G
42	ヒヨドリ	Hypsipetes amaurotis	+	F
43	モズ	Lanius bucephalus	+	F, G
44	アカモズ	Lanius cristatus	+	G
45	ミンサザイ	Troglodytes troglodytes	+	S
46	ノゴマ	Erethacus calliope	+	F, G
47	コルリ	Erethacus cyane	+	F
48	ジョウビタキ	Phoenicurus auroreus	+	F
49	ノビタキ	Saxicola torquata	+	G
50	イソヒヨドリ	Monticola solitarius	+	G, S
51	トラツグミ	Turdus daums	+	F
52	クロツグミ	Turdus cardis	+	F
53	アカハラ	Turdus chrysolus	+	F
54	ウグイス	Celtia diphone	+	F, G
55	エソセンニューウ	Locustella fasciolata	+	F, G
56	シマセンニューウ	Locustella ochotensis	+	G
57	コヨシキリ	Acrocephalus bistrigiceps	+	G
58	エソムシクイ	Phylloscopus tenellipes	+	F
59	センダイムシクイ	Phylloscopus occipitalis	+	F
60	キビタキ	Ficedula narcissina	+	F
61	コサメビタキ	Muscicapa latirostris	+	F

62	エナガ	Aegithalos caudatus	+	F
63	ハシトガラ	Parus palustris	+	F
64	コガラ	Parus montanus	+	F
65	ヒガラ	Parus ater	+	F, G
66	シジュウカラ	Parus major	+	F, G
67	ゴジュウカラ	Sitta europaea	+	F, G
68	アオジ	Emberiza aureola	+	F, G
69	クロジ	Emberiza variabilis	+	F
70	オオジュリン	Emberiza schoeniclus	+	G
71	カワラヒワ	Carduelis sinica	+	F, G
72	ベニマシコ	Uragrus sibiricus	+	F, G
73	コムクドリ	Sturnus philippensis	+	F, G
74	ムクドリ	Sturnus cinerescens	+	G
75	カケス	Garrulus glandarius	+	F
76	ハシボンガラス	Corvus corone	+	F, G, S
77	ハシトガラス	Corvus macrorhynchos	+	F, G, S

1) 1981: $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ 2) 1979: $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$, 1980: $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ 3) F: 丘陵森林帯 G: 台地草原、段丘斜面 S: 海岸、岩礁帯 4) 1980: $\frac{1}{2}$

チュウサギ、ツメナガセキレイも北海道では稀な種類である。海岸の岩場で繁殖していたのはウミウ、オオセグロカモメ、アマツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、イソヒヨドリ、ハシトガラス、ハシボンガラスの8種であった。海に突き出たある岩場にはオジロワシ成鳥がしばしば見られ、近くに営巣しているものと考えられた。羅臼側海岸ではオジロワシの亜成鳥が時々観察された。知床岬沖に広がる岩礁帯にはウミウ、オオセグロカモメのほか、ヒメウ、ミツユビカモメ、ウミネコが多数見られ、合わせて500羽を越えることもあった。岩礁帯は繁殖する海鳥の餌場となるだけでなく、非繁殖鳥の集結する場所ともなっているようだ。台地草原にはピンズイ、ノゴマ、ノビタキ、シマセンニューウ、アオジ、カワラヒワが多く、カワラヒワは10羽前後の群れがしばしば観察された。ノゴマは海岸への斜面に多く見られた。

森林内では37種の鳥類が観察され、林縁部でオオタカやノスリが見られた。1980年5月22日には渡りの途中と思われるジョウビタキが1羽見られた。

(2) 啓吉湾の海鳥繁殖地

知床岬に近い啓吉湾内にある独立岩は、ウミウとオオセグロカモメの繁殖地となっていた。知床半島西側海岸の宇登呂と知床岬の間にはウミウのコロニーが続いており、営巣数の合計は1979年で690巣が数えられた。1980年305巣、1981年489巣と年による変動が見られたが、現在知られる限り極東で最大の繁殖地である。また、オオセグロカ

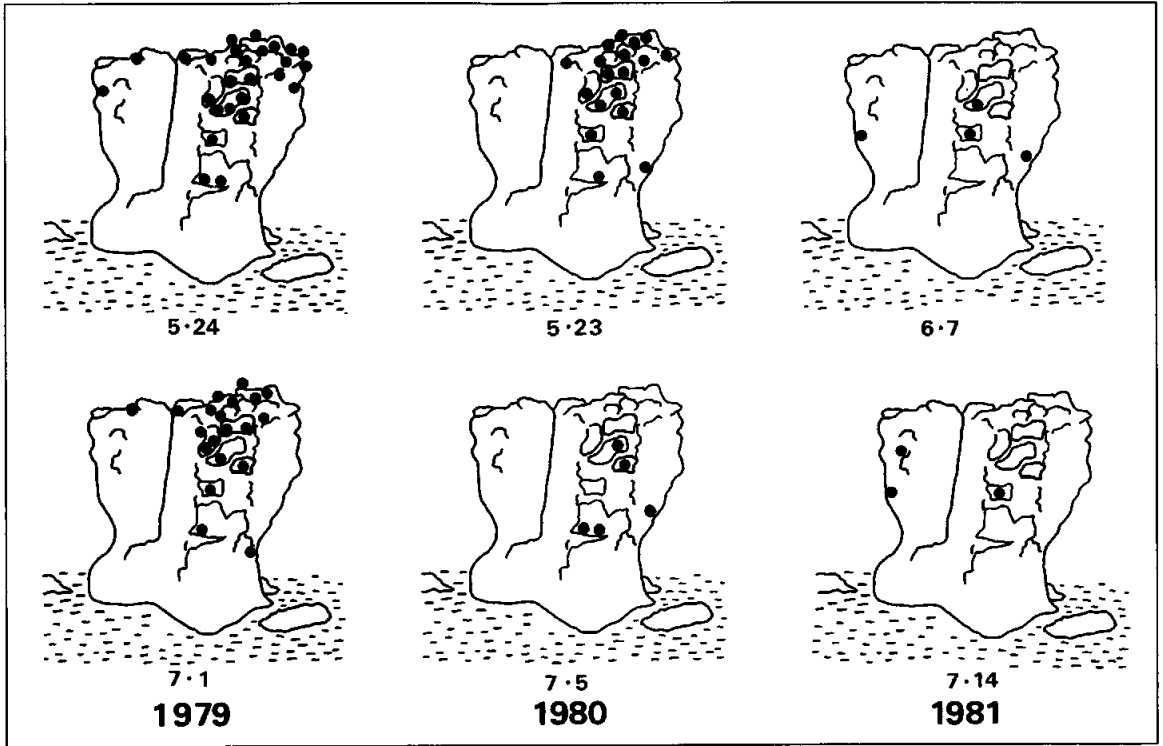


図1. 啓吉湾内の独立岩南面におけるウミウの営巣場所

モメも1979年以降毎年 400巣以上が数えられ、道東太平洋岸の離島と並ぶ重要な繁殖地となっている(中川、1981及び未発表資料)。

啓吉湾の独立岩は、営巣数は少ないながらも陸上から観察できる数少ない海鳥営巣地の一つである。ここでウミウの営巣数にも年次変動が見られた(表2)。また、同じ繁殖期間中での営巣数や営巣位置の変動もあった(図1)。この営巣地では1979年から3年の間にウミウの営巣数が減り、かわって1979年には営巣のなかったオオセグロカモメが1981年には25巣に増え、独立岩上部の平坦地は完全にオオセグロカモメにとってかわられた。

1980年7月にはこの独立岩の上部に旗の付いた測量用ポールが立てられていたことから、この年の営巣に少なからぬ人為的影響があったと思われる。

この年を除くと人為的影響はなかったと考えられることから、営巣数や営巣位置の繁殖期間中の変動の要因として、ウミウの個体差による繁殖開始時期のずれ、捕食者による営巣阻害と再営巣などが考えられる。この営巣地ではウミウの卵をねらうハシボソガラスとオオセグロカモメが見られ、巢中のウミウが防衛する場面も見られた。調査中にオジロワシ1羽が営巣地の上を旋回したことがあった。この時はカモメの声で騒然となり、独立岩から多くのオオセグロカモメとウミウが飛び立った。オジロワシは営巣地を襲うことなくやがて飛び去ったが、森(1980)はオジロワシが単独あるいはつがいで岩棚に営巣している海鳥を襲い、親鳥かひなを片足でぶらさげて逃げ、繁殖地が騒然となったことを報告している。

表2. 啓吉湾独立岩のウミウ営巣数の変動

調査日	1979		1980		1981	
	5/4	7/1	5/2	7/5	6/7	7/14
営巣数	39	29	18	5	6	4

(3) カラス類の岩棚営巣

海岸線にはハシボソガラスとハシボソガラスが営巣していたが、そのほとんどが海食崖の岩棚に営巣しており、樹上の巣は少なかった。営巣するカラス類は二種のみで、ワタリガラスの営巣はな

表3. カラス類の岩棚営巣

地域	図中 番号	調査年	営巣 形態	種 名	地 上 の 高 さ m	抱卵 確認	産卵 数	幼鳥 数
知 床 半 島 先 端 部	1	1980	岩棚A		—			
	2	1979	〃 B		15			
	3	1979	〃 〃	ハシボンガラス	10	○	4	4
	4	1981	〃 A		9			
	5	1981	〃 〃		11			
	6	1981	〃 〃		8			
	7	1981	〃 〃		10			
	8	1981	〃 〃		8			
	9	1981	〃 〃	ハシボンガラス	10	○	2+	
	10	1981	〃 〃		7			
	11	1980	〃 〃	ハシボンガラス	—	○		
	12	1980	〃 〃		10			
	13	1979	〃 〃	ハシボンガラス	18			3
	14	1981	〃 〃	ハシブトガラス	17	○		
	15	1980	〃 B		15			
	16	1980	〃 A	ハシボンガラス	15	○		
	17	1980	〃 〃	ハシボンガラス	20	○		
カシニ		1981	岩棚A	ハシボンガラス	—	○		
幌別		1981	岩棚A	ハシブトガラス	60 以上	○	2+	
宇登呂		1981	岩棚A		18			

※ A：切立った崖の岩棚 B：独立岩のくぼみや割れ目

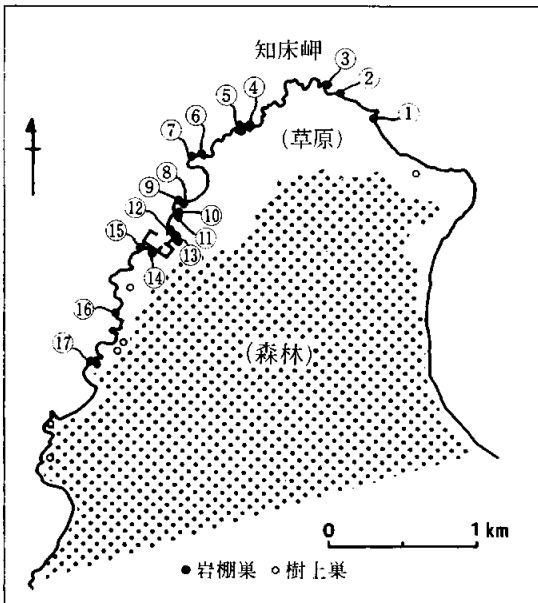


図2. カラス類の岩棚営巣箇所



写真2. ハシボンガラス営巣地 (No.16) と周辺の環境



写真3. ハシボンガラス営巣地 (No.16)



写真4. ハシボンガラスの幼鳥 (No.3)



写真5. ハシブトガラス岩棚巣 (No.19) と巣を離れた親鳥

かった。

今調査では8ヶ所の巣を調べたが、いずれも岩棚に作られており、うち2ヶ所（ハシボソガラス1ヶ所、ハシボソガラス1ヶ所）が抱卵中であった。他の6ヶ所はカラスの姿がなく、産卵、抱卵とも確認できなかった。知床半島先端部以外でもこの年、半島中央部のカシュニでハシボソガラスが、幌別でハシボソガラスが岩棚の巣で抱卵していた。この2ヶ所ともウミウのコロニーの中に営巣していたものである。8月には宇登呂のオロンコ岩にカラスの岩棚上の巣があったが、すでにカラスの姿は見られなかった。今調査に1979年と1980年の調査結果を合わせると知床半島先端部の海岸線約8kmに20ヶ所、中央部に3ヶ所の岩棚営巣が見られた。うち抱卵の確認できたものがハシボソガラス2ヶ所、ハシボソガラス6ヶ所で、巣立ち前の幼鳥の確認できたものがハシボソガラス2ヶ所である（図2、表3）。岩棚の巣は海に面しており、満潮やしけの時は巣の下が海面となるものばかりであった（写真）。ハシボソガラスの岩棚営巣については、26年前に同じく知床半島先端部で2ヶ所見つけられており（永田、1956）今回は再確認といえる。

ハシボソガラスは樹上に営巣するのが普通である。時には海岸の崖の岩棚やくぼ地、土手や古いビルにも営巣するがそれは営巣に適した樹木の無い場合に限られる（Goodwin, 1976）。しかし、我が国で岩棚への営巣が見られるのは現在知られる限り知床半島だけである。一方、ハシボソガラスの営巣は樹上で行なわれ、放送局のアンテナや送電塔に営巣した例もあるが（清椏、1978。浜口、1980）、崖の岩棚への営巣はこれまで知られていない。

抱卵や産卵の確認できなかった巣は、抱卵中の巣に近接しているものが多い。No.8とNo.9の巣との距離はわずか38mであり、No.9で抱卵中のつがいのナワバリの中にNo.8の巣があった。両巣とも前年にはなく、この年新たに作られたものである。No.9のつがいが造巣途中で放棄したものとも思われるが、他の同じような空の巣も抱卵中の巣に近いものが多いことから、繁殖中のつがいがナワバリ内に複数個の巣を作ることも考えられる。7月15日にはすでに繁殖を終えた後と思われる、No.9、No.8ともカラスの姿はなかったが、No.8の巣には新

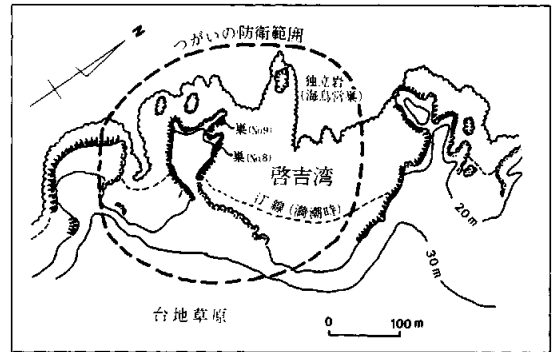


図3. 岩棚巣No.9に営巣のつがいの防衛範囲



写真6. 啓吉湾の岩棚巣 (No. 9) と湾内の独立岩



写真7. 岩棚巣 (No. 9) で抱卵中のハシボソガラス

たな巣材が補強されていた。

No.9の巣では6月7日に雌と思われる1羽のハシボソガラスが抱卵しており、雄と思われる1羽は約100m離れた啓吉湾内の独立岩（ウミウとオオセグロカモメの営巣地）上に常時見られた（図3）。巣材には木の小枝やつるが使われており、魚場に使われているロープやひも類も混っていた。産座には木の皮や獣毛がしかれていた。観察位置からは卵が2個見えた。8時40分から15時40分の観察中に、このつがいのナワバリ中に侵入したカラス

を撃退する場面が5回見られた。ハシボソガラスのナワバリ防衛について羽田・飯田(1966)は、産卵、抱卵期には雄のみが攻撃する型が70.5%と多く、雌雄17.5%、雌のみが12%と少ないと報告しているが、この巣では5回とも雄と巣を離れた雌の2羽で侵入者への攻撃が行なわれた。抱卵中の雌への雄による給餌は見られず、雌は観察中に3度巣を離れ干潮となっていた岩礁上で採食した。うち2回はナワバリ内であったが、1回は啓吉湾東の岩礁に飛び、ここで採食中の15羽のカラス類に混って採食していた。観察中に巣の上空をオジロワシが約一分間旋回したが、その間抱卵中の雌は巢中でじっと動かずにいた。これは“Freezing”による防衛行動とも思われた。

知床半島先端部では海岸線や台地草原にハシボソガラスが広く分布しており、ハシブトガラスは番屋周辺に集中して見られた。特に番屋の賄いのおばさんが魚の処理をする時には数多くのハシブトガラスが集まり、6月8日朝に文吉湾で見られた42羽のカラスはすべてハシブトガラスであった。文吉湾を除く海岸線では営巣するものすべてと、観察されたカラスの大部分はハシボソガラスである。Higuchi(1979)は、ハシブトガラスとハシボソガラスの二種に棲み分けが見られ、森林や市街地、ゴミ捨て場などにハシブトガラスが生息し、平野部の耕作地や川原など樹木のある開けた環境にハシボソガラスが生息するとしている。知床半島先端部の海岸線では、番屋周辺の人の活動する地域にハシブトガラスが多く、他の海岸地域にはハシボソガラスが広く分布していた。

知床半島先端部でカラスの岩棚営巣が一般的に行なわれるのはなぜであろうか。この地域では海岸岩礁帯には貝類や甲殻類、ウニなど豊富な餌が分布している。また、魚類や鳥類、海獣類の漂着死体も多くカラス類の主な餌場となっている。一方、カラス類の捕食者である猛禽類、特にオジロワシが生息していることもこの地域の特徴である。森(1980)によると、知床半島で繁殖するオジロワシに捕食される餌の46.8%は鳥類であり、そのうちハシブトガラスとハシボソガラスが35%を占めている。Yom-Tov(1974)は餌と捕食がハシボソガラスの繁殖に与える影響の研究から、餌の分布が繁殖の成功を限定する第1の要因であることを示し、餌が分散している時には親は巣を離れて

長い時間を過すため、ヒナが捕食者に攻撃されやすいとしている。これらから考えると、知床半島先端部では岩礁に近い海岸線に営巣することが、繁殖の成功率を高めることになると思われ、一方、海岸の台地上は草原であり、崖にもほとんど樹木が無いことから岩棚への営巣が一般的となっているのではないだろうか。

引用文献

- 網走道立公園審議会、1954：網走道立公園知床半島学術調査報告、148pp.
- Goodwin, D., 1976: Crows of the World. 354 pp. Cornell Univ. Press, Ithaca.
- 浜口哲一、1980：街の生きものたち、24pp. 平塚市博物館
- 羽田健三・飯田洋一、1966：ハシボソガラスの生活史に関する研究Ⅰ 繁殖期(第Ⅰ報)、日生態会誌、16(3)、97—105
- Higuchi, H., 1979: Habitat segregation between the Jungle and Carrion Crows, *Corvus macrorhynchos* and *C. corone*, in Japan. Jap. J. Ecol., 29, 353—358
- 広野孝男、1978：羅臼町の鳥—ラウス温泉周辺の4年間の記録、北海道野鳥だより、31、2—5
- 北海道教育委員会、1967：知床半島特別調査報告—北海道文化財シリーズ第9集、84pp.
- 清棲幸保、1978：増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅰ、444pp. 講談社
- 森信也、1979：斜里町管内の鳥類相について、知床博研報、1、1—10
- 、1980：オジロワシの繁殖生態、鳥、29、47—68
- 永田洋平、1956：知床半島(その三)、野鳥、21(6)、388—393
- 中川元、1981：知床半島の鳥類調査報告、知床半島自然生態系総合調査報告書(動物篇)、43—79
- 帯広畜産大学、1962：帯広畜産大学知床半島学術調査団報告第1報、103pp.
- 大泰司紀之(編)、1981：知床半島自然生態系総合調査報告書(動物篇)、199pp. 北海道
- Yom-Tov, Y., 1974: The effect of food and predation on breeding density and success, clutch size and laying date of the Crow (*Corvus corone* L.), J. Anim. Ecol., 43, 479—498